

「じ、じゃあ……次のお悩み相談で最後にします。今日も来てくれて、ど、どうもありがとう」

夜ノ森メルル（よのもり めるる）がたどたどしくお礼を言うと、画面の左端を流れるコメントの速度がさらに加速した。

——こちらこそありがとう！

——メルルちゃんの声は本当に可愛くて癒されるなあ。

——始めて来たけどギャップがめっちゃくちゃ可愛い！

メルルは自分の姿をアニメキャラクターに変換して動画配信サイトで配信する、いわゆるブイチューバーだ。

見た目は一言で言えば地雷系チアリーダー。

ピンクのインナーカラーが入った黒髪に、目の下には赤黒い隈のようなメイク。白を差し色としたピンクのプリーツスカートにショートジャケット。両手にはピンク色のポンポンを持ち、左手首には包帯が巻かれているという、なんともチグハグな見た目のキャラクターだった。

本人の表情も固く、視線はずっと泳いでいて、瞳にも光が無い。

だがその突飛なキャラクターに反して配信の雰囲気は温かく、ゆっくりでいいよ、頑張

れ、などと応援するようなコメントで溢れていた。

「メ、メルルさんはじめまして。『ねころん』と言います。ち、中学三年生の女子です。私は人に嫌われることがとても怖く、い、いつも相手に合わせた行動や返答をしてしまいます。そ、そのおかげで学校では、いわゆる人気者のグループに所属できていますが、グループの子とは本音で会話したことが一度もありません。や、やりたくないことでも……たとえば休日に派手な場所に遊びに行ったり、遅くまで学校に残っておしゃべりをしたりすることは本当は嫌なんですけど、一度も断ったことがありません。正直、精神的にかなり無理をしているのですが、ひ、ひとりぼっちになる方がもつと怖いので、これからも無理してでも相手に合わせて、今の状態を続けた方がいいのでしょうか？『ねころん』さんからのご相談でした。あ、ありがとうございます」

メルルはメールの内容を読み終わると、お礼を言うように遠慮がちにポンポンを振った。「ね、『ねころん』さんの不安はとても自然なことです。私たちは全員、数の大小や関係性の強弱はあっても、共同体——つまり他の誰かと繋がった社会の中で生活しています。『ねころん』さんの場合で言うと、家族やクラスメイト、学校の先生、近所の人、塾に通っていればその人間関係が小さな共同体にあたります。き、共同体は人が生きていく上で不可欠なので、共同体から嫌われたり、追放されたりすることは、お、多くの人にとって、とても強いストレスになります。で、でも、同時に全員に好かれるということも不可能です。『ねころん』さんがいくら話を合わせる努力をしても、合わない人は必ずいます。き、逆に

相手からいくら好意を寄せられても『ねころん』さんが好きになれない相手も必ずいます。そ、それを踏まえて今の『ねころん』さんの状態なのですが、まず共同体には選べる共同体と選べない共同体があつて……」

メルルは心理学や一般論を交え、真摯にアドバイスをした。話し方こそたどたどしいが、メルルの声質は柔らかく語り口もゆつくりなので聞こえやすい。そして難しい用語などは都度分かりやすい言葉に言い換え、例えを用いて解説した。最後に同意するコメントや反論のコメントも適度に拾いながら回答を終えると、エンディングのBGMに切り替えた。

「あ、あの……最近寒くなつてきたから、みんなも体調に気をつけてね……。それじゃあ……おつメルル……」

遠慮がちにポンポンを振り続けるメルルの前に黒いカーテンが引かれ、白いウサギが跳ねるアニメーションに変わった。メルルの姿が見えなくなつても、好意的なコメントがしばらく流れ続けた。

一ノ瀬葵（いちのせ あおい）は配信ツールが切れたことを確認すると、両手で丁寧にヘッドセットを外した。

耳当ての部分がぐつしよりと汗で濡れ、喉もカラカラに乾いている。

葵はすっかり冷えてしまったコーヒを一息で飲むと、力尽きたように机に突っ伏した。まるでフルマラソンを完走した直後のような疲労感だ。葵は頬を机につけたまま器用にア

ルコールティッシュで耳当てを拭くと、顔を上げて動画配信サイトのダッシュボードを見た。

- ・ホスト名 夜ノ森メルル
- ・チャンネル登録者数 四万三千人
- ・収益化 可能（銀行口座が登録されていません）

「……ま、また増えてる」

葵はポツリと呟くと、電池が切れたように再びデスクに突っ伏した。頬に当たるデスクの冷たさが心地良く、ものの数秒で瞼が閉じる。

だが眠りの沼に落ちる寸前、インターホンが葵の意識を掴んだ。

鉛のように重い身体を引き摺ってモニターを見ると、マンシヨンのエントランスに料理宅配サービスのパックパックを背負った男が立っていた。そういうえば配信前に夕食を注文していたことを忘れていた。

葵はオートロックを解除し、洗面台で軽く身支度を整えると、玄関の呼び鈴が押されるのを待つてドアを開けた。色黒の肌に、ベースボールキャップから長い茶髪を垂らした配達員が白い歯を見せた。

「お待たせしました。『マルヴァアローザ』のボロネーゼとチキンサラダで間違いないです

か？」

葵は無言で配達員の目を睨むように見つめた。

「あの、一ノ瀬葵さんですよね？」

葵は配達員を凝視したままこくりと頷く。

「お代はキャッシュレスでいただいていますので、このままのお渡しになります……」

商品を受け取っても無言で凝視する葵に、配達員の顔から徐々に笑顔が消えていった。

「あの……なにか俺、失礼しちゃいましたかね？」

配達員がやや苛立った声で聞いた。葵が黙って首を振ると、配達員は少し乱暴にドアを閉めた。葵は配達員が遠ざかるのを待つてから音を立てないように鍵を閉め、パソコンの前に料理を置くと、両手で顔を覆ってベットに仰向けに倒れ込んだ。

またやつてしまった……。

せつかく届けてくれたのに、なぜ自分は「ありがとうございました」の一言すら言えないのだろうか。

メルルの配信では偉そうにアドバイスしておきながら、本来の自分はコミュニケーションどころか、配達員にお礼すら言えない極度の対人恐怖症だ。家族と、ごく数人の親しい友人を除いては、笑うどころか何かを言おうとしても言葉が出てこない。挙げ句の果てに相手の目をじつと見る癖があり、いつも怖がられる。たとえ人生で二度と会わないかもしれない配達員が相手でもだ。

原因はわからない。

生まれつきと言えばそれまでだが、人間関係において過去に決定的な出来事やトラウマがあったわけでもなく、かといって自分に自信が無すぎて萎縮しているわけでもない。事実、葵は側から見ても別段コンプレックスに感じなければならぬ所は無い。同年代に比べて背が低く、発育に乏しいところはあがるが、顔はむしろ整っている方だ。性格も根暗や卑屈というわけではなく、むしろ人見知りな性格を埋め合わせるように、積極的に一人でできる趣味やスポーツに取り組んでいる。

ブイチューバーとしての活動もそのひとつだ。

今までコミュニケーション講座や話し方講座に数多く応募したのだが、講師とは対面はもちろん画面越しですらまともに喋ることができなかった。前述のじつと目を見る癖で、怒り出す講師もいた。

そのように思い悩んでいた最中、ブイチューバーという存在を知った。お互いの顔が見えなければ、少しはまともな人と会話できるかもしれないと思った。

葵は思い立つと行動が早い。すぐに配信ツールと機材を購入し、アバターは出来合いで売られていた「夜ノ森メルル」をチャアガールが好きだからという理由で購入した。

配信当初は多くても十人前後が見てくれる程度で、葵もぎこちないながらも対面よりはリラックスして話せることが楽しかった。自分も対人恐怖症なのだ、というリスナーの悩みに応えているうちに徐々に登録者数が増えていったが、このままのんびりと続けていけ

ればと思っていた。

しかし数ヶ月経ったある時、ネットニュースに「地雷系チアガールのカウンセラー？」という見出しで紹介され、一気に広まってしまったのだ。

再びチャイムが鳴ったので、葵は反射的にベッドから身体を起こした。

もう荷物もデリバリーも頼んでいないはずだ。

訝しがりながらドアスコープを覗くと、先ほどの配達員が立っていて、「すみません。店からもらったサービスの品を渡し忘れてまして」と言いながらバックパックを掲げた。サービスの品など渡さなくてもわからないのに、わざわざ戻ってきてくれたようだ。

ドアを開けると、葵は大きく息を吸い込んだ。

「……あ、あ」

声が震える。

がんばれ！ 今度こそちゃんとお礼を言うんだ！

葵は自分を鼓舞しながら、両手をぎゅつと握りしめた。

「あ、あり……が……」

「これ、サービスの品です」と言いながら、配達員がバックパックから手を引き抜いた。

そして葵の胸を力任せに突き飛ばした。

葵は完全に不意を突かれ、勢いよく廊下に倒れ込んだ。咄嗟に受け身をとり頭こそ打たなかったものの、目の前に星が飛ぶ。配達員が素早くドアの中に入り、鍵を閉めるのが視

界の隅に映った。

「……いきなりガンつけられてムカついたけどさ、お前よく見ると結構可愛い顔してんじやん？」

配達員は土足のまま廊下に行くと、葵の腹に杭を打つように拳を突き込んだ。

「ぐぐッ?!」

「一人暮らしだろ? こんな広いマンション住んで、良いところのお嬢ちゃんか?」

配達員は続けざまに葵の腹を殴った。軽い脳震盪を起こしていたため防御することができず、先ほど飲んだコーヒの味が喉までせり上がってきた。配達員は葵の両手首を掴んで強引に身体を開かせると、葵の身体に覆い被さった。

「終わってから通報しても無駄だぜ。バイト先に伝えてある住所も名前もデタラメだからな。ベッド行くか? 俺はここでもいいけどな」

配達員の興奮した息が葵の顔にかかる。葵も肩で息をしながら、配達員の目をじつと見つめた。配達員は気がついていないが、葵は呼吸のタイミングを配達員に合わせている。

「だからガンつけてんじやねえよ。ムカつく女だな。ま、突っ込んでやれば大人しくなるだろうがよ」

「……じ」

「あ?」

「じ……人……妖……?」

葵は配達員の目をじつと見つめたまま聞いた。

配達員は言葉の意味が理解できない様子だったが、ようやく思い当たったように目を開いた。

「ジンヨウ……？ ああ、あの都市伝説のことか。人間と同じ姿で、セックスで人間から養分を吸い取って廃人にするバケモンだろ？ お前そんなもん信じてんのかよ」

配達員が徐々に顔を近づける。唇が触れ合う直前、葵は配達員が息を吐いたタイミングで素早くベルトを掴み、思い切りブリッジした。

配達員は葵の身体を飛び越えて顔面から床に落下する。葵は素早く身体を起こして悶絶している配達員の背後にまわり込み、襟を掴んで頸動脈を絞め上げた。

配達員は短い悲鳴を上げ、十秒も経たないうちに意識を手放した。

葵は呼吸が整うと、配達員の手足をガムテープで拘束した。その間も配達員は起きる気がない。

弱すぎる。

今まで戦ってきた人妖は身体能力の差こそあれ、ここまで弱い個体はいなかった。能力を底上げするバトルスーツも身につけずに、こんなに簡単に倒せるはずがない。

葵は複雑な気分です属する人妖討伐組織「アンチレジスト」から支給されたカード型の端末を配達員の首に押し当てた。

青いランプが点灯する。

やはり人妖ではなく、ただの人間だ。

「……困ったな」と、葵は溜息まじりに呟いた。

人妖なら倒せば終わりだ。

あとはアンチレジストの回収班に連絡して処理をお願いすればいい。

だが暴漢となると警察に連絡して事情を説明する必要がある。警察に対して自分がまともな経緯を説明できるとは思えない。しどろもどろになり、むしろ怪しまれて警察署に連行される未来が見える。違う。私はなにもやってない。首は絞めたが。

葵が頭を抱えて悶々としてしていると、配達員がモゾモゾと起き出したのでまた首を絞めた。やはり瑠奈（るな）にお願ひするしかないか……。

葵は強烈な自己嫌悪に陥りながらスマホを手を取った。

2

真白瑠奈（ましろ るな）に蹴り飛ばされた大柄な男は映画のワイヤーアクションのよう
に吹っ飛び、配管ダクトに背中を強打してうずくまった。

「助けを呼んでも誰も来ない——だったっけ？」

瑠奈は倒れた男を見下ろしながら、綺麗な歯並びを見せて笑った。

雑居ビルの屋上。

男の背後に浮かぶ大きな満月が瑠奈の目に反射し、暗く青い光を反射している。

「そのセリフ、そのまま返すわ。仲間の人妖がいるなら呼べば？ 探し出して倒す手間が省けるから」

男はうづくまっただまま、ファッションモデルのように立っている瑠奈を睨みつけた。

四角い顔が怒りで真っ赤になるが、どう足掻いても瑠奈に勝ないことはわかっている。

まさか人妖の俺が……人間よりも優れた身体能力を持つ俺が、アンチレジストの戦闘員とはいえ、こんな小娘に手も足も出ないとは夢にも思わなかった。

そしてこのような危機的状況であるにもかかわらず、男は瑠奈の姿を見て生唾を飲み込んだ。

釣り落としした魚は大きいと言うが、釣り落とすどころか勝手に網に入ってきたマグロに噛みつかれたような気分だ。

二時間ほど前、男は新しい女を探すために夜の繁華街を彷徨っていた。

今の養分であり金づるの女は駆け出しのグラビアアイドルだったが、いよいよ使い物にならなくなってきた。養分を補給するための性行為は男が徹底的に自分好みに調教し、金はグラビア撮影だけでは稼げないので高級風俗店に入れて貢がせている。だが最近は生気を吸いすぎたのかすっぴん痩せてしまい、グラビアも風俗店も売上が悪くなっている。言動もやや要領を得なくなってきたので、廃人になるのも時間の問題だった。

しばらく街を徘徊した後、男の足は自然と都内の有名なナンパスポット、通称「釣り堀」と呼ばれる公園に向いた。

誰がいつ決めたのかは知らないが、「釣り堀」には明確なルールがある。

ただの公園から「釣り堀」になるのは夜の九時から翌朝四時まで。ナンパ目的の男は中央広場を囲むように配置されたベンチで待機する。ベンチが埋まっている時は立っただけでもいいが、決して広場の中に入ってはいけない。広場の中央には大きなポールライトが一本立っていて、女がその下で五秒以上立ち止まれば、それは「ナンパしてほしい」の合図となる。立ち止まらない女はただの通行人で声掛けは厳禁。レベルの高い女がライトの下で立ち止まると、まさに練り餌を放り込んだ釣り堀のように男が群がることから、いつからか「釣り堀」と呼ばれるようになった。

ベンチは全て埋まっていた。

近くのベンチでは飲んだ後らしい冴えないサラリーマン風の男が二人、落ち着きのない様子でスマートフォンと広場を交互に見ていた。

見ているだけでイラつく奴らだ。

男が肩で風を切って近づくと、気がついた一人がもう一人を連れ立ってすぐにいなくなつた。

男は鼻を鳴らしながら、どかりとベンチに座る。

狩猟時代から男の価値は強さだと決まっている。弱い男に生存価値は無いし、子孫を残

す権利もない。女だつて好き好んで弱い男を選ぶものか。

「せいんばーい！ こんな所で何やつてるんですかー？」

突然、見知らぬ女が甘えた声を出しながら腕に抱きついてきた。驚いて振り解こうとしたが、女の姿を見て思いとどまる。

紺のブレザーに付いているエンブレムは都内の有名私立高校のものだ。

垢抜けたショートカットの金髪は所々に蛍光ピンクのメッシュが入っていて、気が強そうなくつきりとした二重まぶたには髪の毛と同じ金色のまつ毛がぐるりと上を向いている。カラーコンタクトとは違うナチュラルな青い目。左耳にはピアスが五つも開いているのに、右耳は青い花を模したシンプルなピアスがひとつだけ。

白人のようだが、在日期間が長いのか、それとも日本で生まれ育ったのか、雰囲気は日本人とほとんど変わらない不思議な女だ。だが透き通るような白く細やかな肌や、プロポーシオンがアジア人とはまるで違う。シャツは第二ボタンまでが開けられて谷間が見えていた。チェックのプリーツスカートからはむっちりとした太ももが伸び、思わず生唾を飲み込んだ。

この派手な女は何だ？

なぜいきなり抱きついてきた？

「あれ？ 人違いかな？」とわざとらしい声を上げながら、女はイタズラっぽい笑みを浮かべてた。言葉とは裏腹に、ますます男の腕に胸を押しつけてくる。「ごめんなさい。知

り合いの先輩に似てたから、つい抱きついちゃった。ヤバイ雰囲気とか、太い腕とか、そっくりだったから」

女はデコレーションした爪の先で男の太い二の腕をなぞりながら、右目でウインクした。

……もしかして逆ナンか？

「立ちんぼ」の雰囲気でもないし、美人局だとしても人妖の俺に敵うわけがない。男を半殺しにした後に女をいたただくだけだ。何のリスクも無い。

男は女の胸や太ももに視線を走らせると、口角を上げた。

「お前、名前は？」と、男が聞いた。

「瑠奈。可愛い名前でしょ？」

「日本人なのか？」

「今はね。六歳の時にアメリカから帰化したから。ねえ、お兄さんの名前も教えて？」

「後で教えてやるよ。とりあえず移動だ。ここは成立したらすぐに立ち去るのがルールだからな」

男が立ち上がった後も、瑠奈は男の腕に抱きついたままだ。周囲の男達から嫉妬と落胆が混ざった視線が注がれる。舌打ちの音すら聞こえてきた。

心地いい優越感が込み上げてくる。

白人のギャルとは大当たりだ。

どうせ遊びまくって他の男の手垢がベタベタついているだろうが、この身体を抱けるのなら文句は無い。人妖の体液にはチャームと呼ばれる催淫効果と魅了効果がある。さつさとホテルに連れ込んで唾液でも精液でも飲ませれば奴隷にできる。

「その先輩と俺、どっちがイケてるんだ？」と男が聞いた。

「うーん、どうだろう。まだ会ったばかりだし」と言いながら、瑠奈は笑みを浮かべて爪の先で男の首筋を素早くなぞった。蠱惑的な仕草にぞくりとする。

「じゃあ比べてみるよ。そこに良い場所があるぜ」

男は瑠奈の手を掴み、公園の裏手のラブホテルを親指で指した。

「どうせそれが目的だろ？」 自慢じゃねえけどな、俺のはスゲエぞ。ほとんどの女は泣き叫ぶか失神するからな」

「ちよつと、何考えてるの？」と言って、瑠奈は男の唇に人差し指を当てて制した。「その前にさ、一緒に月を見に行かない？」

「……あ？ 月？」

「そう。お、つ、き、さ、ま。今日はスーパームーンなんだって。私、誰も来ない月見スポット知ってるんだよね」

瑠奈は男の手を引いて勝手に歩き出した。

月見？

なんのつもりだ？

瑠奈は男の手を引きながら裏路地から雑居ビルに入り、古いエレベーターを使って屋上に出た。

そんなに高いビルではないが、なるほど確かに見晴らしがよく、他のビルや通りからは死角になつてゐる。

ドアが閉まると同時に、男は瑠奈の背後から抱きついて胸を鷲掴みにした。

「ちょ、ちよつと待つて！ 待つてつてば！」

「今さら待てるかよ。外でヤルのが好きなんだろう？ 早く壁に両手つけてケツ向けろ」

瑠奈は予想外に抵抗するが、男は構わず胸を揉み続け、首筋を舐め上げた。「だから待つてつてば！ 制服汚れるとまずいんだって！ ね？ せつかく良いの着てきたんだから、ちよつと準備させて？」

「……あ？ 準備？」

男が瑠奈の首から顔を離した。

「あれ？ 言わなかったっけ？ 私コスプレが趣味でさ、色んな衣装着るのが好きなの」

「コスプレ？」

「うん。実は今日はさ、制服の下にバニーガールの衣装着てるんだよね」

「ほお……」

男の鼻の下が伸びた。

遊び慣れしていると思つたが、ここまで好き物だとは思わなかった。

「俺もバニーガールは好きだ」

「気が合うじゃん。じゃあ準備してきてもいい？　ちゃんと耳も付けてくるから」

「ここで脱げよ。見ててやる」

「ダメだつて。こういうのはお互いインパクトが大事なの。すぐに着替えるからちよつと待ってて」

瑠奈はカバンを掴むと屋上から出て行つた。

美人局ならここで男が出てくるタイミングだが、ちゃんとドアの内側で服を脱いでいる心配がある。

男の期待が最高潮に達した時、瑠奈が「おまたせー」と明るく言いながら勢いよくドアを開けた。そして、瑠奈の姿を見た男は時間が止まったように固まった。

確かにバニーガールだ。

近未来のバニーガールはこんな感じなのかもしれない。

純白のレオタードはヘソ下から胸元のあたりまでが半透明の素材になっている。エナメルのような純白のロングブーツと同素材のロンググローブ。衣装全体には所々に金色の装飾が控えめに施され、頭には薄紫色に発光するウサギ耳のようなヘッドパーツが二本伸びていた。

「どう？　気に入ってくれた？」

瑠奈が口角を上げて首を傾げた。だが、目つきが声をかけられた時とは別人のように鋭

くなっている。

「私専用の対人妖バトルスーツ……可愛いでしょ？」

「ま、待て……待ってくれ……」

男が強打した背中を庇うようによろよると立ち上がり、瑠奈を押し留めるように両手を突き出した。

「勝てないのは十分わかった……頼むから見逃してくれ。もちろんタダとは言わねえ。このエリアを仕切ってる人妖の情報を教えてやる。仕切ってるのは凍矢（とうや）さんって人だ。家出少女を囲ってモグリの風俗店を経営して、めちやくちや稼いでる。二週間……いや、十日以内に情報を集めて、あんたに教えるよ。だから見逃してくれ」

瑠奈は口角を上げ、思案するように首を傾げた。

男は瑠奈の死角になるように尻のポケットに手を入れる。瑠奈のヘッドパーツがピクリと動いた。

「あ……あとはオマケに俺の仲間も売ってやるよ。普段から情報交換してる仲間がいる。俺が一声かけりやすぐに集まってくるバカな奴らさ。あんたは待ち伏せして捕まえるなり、ぶちのめすなりすればいい」

「友達を売る……ってこと？」

瑠奈のヘッドパーツがまた動いた。左右対称にぴんと立ち、まるで角のように見える。

「まあ、そんなところだ。だから俺だけは……」

男がゆつくりと瑠奈に近づいた。そしてポケットから腕を抜いた瞬間、狙い澄ましたように男の手首を瑠奈が蹴り上げた。

男が握っていたスタンガンが瑠奈の背後に落下する。

「ごめんねー。怪しい動きするとわかっちゃうんだよね」瑠奈がヘッドパーツを指でトンと叩いた。顔は笑っているが、眉間には皺が寄っている。「あとさ……。私、友達を大切にしない奴がマジで許せないんだよね」

瑠奈は失神した男の背中に胡座をかいて座っていた。

心地良い夜風が瑠奈の髪を撫でた。正面には大きな満月が浮かび、瑠奈の鼻歌に合わせてヘッドパーツが踊るように動いている。

わずかな時間でもスーパームーンを堪能できてよかったと瑠奈は思った。オペレーター
の天宮凜（あまみや りん）は間も無く回収班を引き連れて到着するだろう。

ふと、手の中のスマートフォンが震えた。

表示された名前を見ると、瑠奈のヘッドパーツが嬉しそうに跳ねた。

「ほーい、どうしたー？」

スマートフォン画面と左耳のピアスが当たってカチリと音が鳴る。

「うん、うん、今？ 大丈夫だよ。ちょうど任務終わって凜と回収班を待ってるところ。」

うん……葵、落ち着いて。ゆっくりでいいよ……はあ！？ 暴漢に襲われた！？」

瑠奈が勢いよく立ち上がった。

同時に屋上のドアが開いて、黒い作業服を着た三人の男と、真っ黒いワンピースを着た小学生のような体格の女が入ってきた。

回収班と天宮凜だ。

瑠奈が通話したまま四人に目配せし、足元の男を指差した。凜は頷くと回収班に指示を与え、三人の男は慣れた手つきで担架とベルト、そして寝袋のようなものを準備し始めた。瑠奈は四人から距離をとって小声で通話を続けた。

「ちょ、ちよつと大丈夫なの？ え？ もう倒した？ 投げてから締め落とした？ その……何もされなかったの？ ああ、よかった……。まだ警察呼んでないんだよね？ うん、大丈夫。説明は任せて。すぐに行くから」

瑠奈はスマートフォンを切ると、回収作業を手伝っている凜の肩を叩いた。振り向いた凜に祈るように両手を合わせて片目を瞑る。

「ごめん！ 葵がちよつとトラブっちゃって同乗できないかも」
「おりよ、そりや大変」

凜は無表情のまま抑揚の無い口調で言うと、タブレットを素早く操作した。

「オッケー。車をもう一台手配したから、到着次第あおっぴの所に行つてあげて。同乗はしなくて大丈夫。予備の拘束テープも一緒に巻いておけば、このクラスの人妖なら目を覚

ましても解けないはずだから」

「ごめんね。安全のために戦闘員も同乗した方がいいんだけど……」

「とんでもない。それよりもすごかったじゃん？ 攻撃、一発も貫ってなかったよね。やっぱり試作品とは違う？」

凜は相変わらず無表情のまま、自分の頭に両手でウサギの耳を表すジェスチャーをした。

天宮凜。

オペレーターとして最も優秀な隊員の一人で、バトルスーツや武器などの開発も手掛けている。

瑠奈のヘッドパーツを作ったのも彼女だ。

服装はいつも黒いワンピース。冬になるとその上に黒いコートを羽織る。髪型は常に濡れているような艶のある黒髪を姫カットにしていて、恐ろしい頻度で美容院に行っているのか、誰も凜の髪が伸びたり短くなったりした時を見ることがない。

そんな凜が可愛いポーズをしたので、瑠奈は無意識に凜の頭を撫でた。

「ちよつとお姉さん？ 私二十歳だよ？ 年上だよ？ 子供扱いしちゃダメ」

凜は抗議するが、ウサギ耳のジェスチャーを続けたまま瑠奈の手を払おうとはしない。

「ごめん、なんか可愛かったからつい」と、瑠奈がニヤけながら言った。「でも凜が作ってくれたこの新型、本当にすごいよ。試作品でも体重が半分になったと思ったのに、今日は

まるで羽が生えたみたい。攻撃の威力も上がってるしね」

「あの蹴り、すごかったよね。目の錯覚かと思った」

「力を加減しないと柵を飛び越しちゃいそうだったからね。相手が攻撃に移る前のわずかな動きも察知できるし、人妖が気の毒になつてくるよ」

瑠奈のヘッドパーツがひよこつと動いた。

ふーむ、と言つて凜は腕を組む。

「まさかここまでの効果が出るとはね。ヘッドパーツはアンテナの役割に加えて、脳に微弱な電流を流して身体能力の強化と感覚神経を増幅させる効果があるんだけど、ほかの戦闘員でのテストでは適合出来ても能力の上昇率はせいぜい数パーセント。なんで瑠奈にだけここまで効果が出るのか正直わからない。ただまあ今後は汎用化とダウンサイジングが課題かな。まだ適性のあるごく少数の戦闘員しか装備できないし、適性があつても瑠奈ちみたくに爆発的な効果が出るわけでもない。そもそも壊されたら終わりだしね。そんなマトになりやすい大きさの外部パーツじゃなくて、本当は脳に直接埋め込むのがベストなんだけど」

「怖いこと言わないでよ……」

「壊される方が怖いじゃん」

「あ、怖いと言えばさ」瑠奈が顔を曇らせて頭を掻いた。「あの男、この近辺を仕切ってる人妖を知っているみたい。凍矢つていう個体名で、家出した女の子を使って無許可の風俗

店を経営してるんだって。まあ命乞いのための出まかせかもしれないし、それ以上のことを聞く前に倒しちゃったんだけど」

「うーん、出まかせとは言えないかもしれない。この近くのホテル周りに集まってる家出した未成年が社会問題になってるでしょ？ 実は半年くらい前から、その子達の失踪件数が増えすぎて上がってるんだよね。もしその人妖が絡んでるとしたら……」

凜も顔を曇らせて言った。普段は無表情でもネガティブな感情だけは表に出るらしい。「了解、目を覚ましたら色々聞いてみる。もし本当だったら、その人妖の対処は瑠奈ちにお願ひするかもしれない。あおつぴは優秀だけど、ヘッドパーツの適性はなかったから」

「オーケー。凍矢の情報がわかったら教えて。ただ、今日みたいな罔捜査はナシでお願いね。すごく恥ずかしかったんだから」

「えー、むしろノリノリだったでしょ？ 遊んでるギャルなんて瑠奈ちのキャラにピッタリじゃん。私はあそこまでおっぱい押し付けろなんて指示は出してないけど？」

凜は悪巧みをするような表情を浮かべながら肩をすくめた。やはりネガティブな表情だけは表に出るらしい。

「——で、さっきの配達員がまた来て、サービスの品を渡し忘れたって言うんですよ。その時点で怪しいなんて思わないじゃないですか。それでドアを開けたら、いきなり突き飛ばされたんです」

「……どのようにして対処されたんですか？」

「こう、馬乗りになって組み伏せられたので、下からブリッジの要領で相手の体勢を崩して、怯んだ隙に背後から絞め技で落としました。この場合は正当防衛が成立しますよね？」

瑠奈は葵の部屋の玄関先で、訪れた二人の警察官（初老の男性と若い男性だった）に身振り手振りで説明した。

警察官たちはメモを取り終わると、お互いの顔を見合わせた。

「うーむ」と、若い警察官のひとりがペンで眉間のあたりを搔いた。「状況はわかりました。確認ですが、あなたは実際に被害に遭われた葵さんではないんですね？」

「そうです」

「もう一度、お名前を確認してもよろしいですか？」

「真白瑠奈です。真つ白と書いて真白（ましろ）。瑠璃色の瑠に、奈良県の奈です」

「失礼ですが、国籍は日本でしょうか？」

「はい、六歳の時に帰化しました。出身はアメリカで、ルナ・ホワイトという名前でした。帰化した時の苗字や漢字は父が決めました」

「なるほど。で、そちらに隠れている方が——」

瑠奈の背後に隠れていた葵の身体がビクツと跳ねた。怯えたリスのようにひよこつと顔だけを出して、睨むように若い警察官を見る。

「こつちが葵です。一ノ瀬葵」と、瑠奈が葵の頭をポンポンと叩きながら言った。「昔からすごい人見知りで、知らない人が相手だとこんな風にまともに喋れなくなっちゃうんですよ。私はこのマンションの別の部屋に住んでいて秒で来れるので、よくヘルプに来るんです」

警察官はまたお互いに顔を見合わせた。

奇妙な組み合わせの二人だ。

瑠奈は、自分たちは同じ高校に通っている幼馴染の友人で、このマンションでそれぞれ一人暮らしをしていると説明した。ここは一等地というほどではないが、都内では比較的地価の高いエリアのタワーマンションだ。家族と同居ならともかく、女子高生がこんな場所ですら一人暮らしなどするだろうか。

見た目も良くも悪くも対照的だ。

瑠奈は一言でいえばギャル風で、背が高くピンクのメッシュが入った金髪に碧眼。制服は着崩していて、左耳にはピアスが五個も開いている派手な見た目。明らかに遊んでいる

雰囲気だ。

もう一方の葵は容姿は整っているものの、背も低く地味な見た目。おとなしいどころか、まともに会話すらできない様子ですつと瑠奈の背後で怯えている。

「葵さん？」

若い警察官の背後で話を聞いていた初老の警察官が、子供に語りかけるように言った。

葵はまたビクツと跳ねた。

「今の瑠奈さんのお話、間違いないですか？」

葵は震えながら、なんとか頷いた。

「随分と怯えているみたいですが、もしかして誰かに脅されていませんか？ 今なら我々がいるので、正直に話していただいても大丈夫ですよ」

「……まあ、そうなるよね」と言つて、瑠奈はため息混じりにこめかみを押さえた。

葵は慌てて首を振つた。

「いや、前にこういうことがあつたんですよ」と、若い警察官が言った。「ある高校生のカップルが、別れ話のもつれから彼女さんが彼氏さんを刺してしまい、気の毒にも彼氏さんが亡くなつてしまつたんです。ところが、あろうことか彼女さんは自分がいじめていた同級生の女の子を脅して、罪を被せようとしたんです。いじめられっ子の女の子が彼氏さんから襲われたことにして、正当防衛を主張したんですよ。上手くいけばいじめられっ子は正当防衛が認められるし、認められなくても彼女さん自身は罪には問われないと考え

た。もちろんそんな浅はかな嘘はすぐにバレましたしただね」

葵は首が折れそうな勢いで首を振った。

「もちろんあなた達の関係がそうだと言っているわけでないですよ」と、初老の警察官がフオーロした。「ただ、今の段階では、我々はあらゆる可能性を考えなければならぬんです。たとえば落ちていた財布を交番に届けてくれた人に対しても、その人が盗んだ可能性はゼロではないので、一応は調べます。可能性がゼロに近くても、証明ができなければ可能性としては残ってしまうんです。申し訳ありませんが、どうかご理解ください。よろしければ、まずはお二人がどのような経緯でご友人になられたのか、教えていただいてもよろしいですか？」

葵と瑠奈は顔を見合わせて頷いた。

「ちよつと恥ずかしいんですけど……」と言つて、瑠奈は本当に恥ずかしそうに頭を掻いた。「私、英語苦手だったんですよ」

「……元々はアメリカにいらつしやつたんですよ？」と、若い警察官が言った。

瑠奈が頷いた。「そうですね……。私の父は生粋のアメリカ人なんですけど、絵に描いたような日本かぶれだったんです。普段着は和服。家も日本人の職人に依頼した日本家屋。床も全部畳敷で、掘り炬燵はあっても椅子はありませんでした。父は仕事の時はさすがにスーツを着て英語を喋っていましたけど、家での会話は全て日本語です。ママはそんな父に呆れて、私が物心つく頃に出ていってしまいました。父は私のためにベビーシッターを

雇ってくれたんですけど、その方も日本出身で、家の中では日本語を話すように父から求められていたそうです。そんな環境で育ったので、私がプリスクール——日本で言う幼稚園みたいな所なんですけど、そこで同級生とまともにコミュニケーションが取れなかったんですよ。周囲の子が何を喋っているのか、半分も理解できなかったんです。そのうち私はプリスクールに行くのを嫌がるようになり、やがて本当に行かなくなりました」

警察官は頷きながらメモを取り、話の続きを待った。

「父は私が言語によるコミュニケーションが困難な状態に陥っていることに気がつき、同時にその原因が自分にあることを知りました。ひどくショックだったそうで、父は——たぶん皆さんも聞いたことのある証券会社のマネジャーなんですけど、すぐに日本支社への異動を申し出て、私と二人で日本に移住することを決めました。今でも時々お酒を飲むと、当時のことを私に謝ります。まあ、今考えれば虐待に当てはまるとは思いませんけど、父に悪気が全く無かったことは私も理解していますし、日本に来てから父は積極的に英語を教えてくれて、今ではアメリカの親族とも問題なくコミュニケーションが取れているので、別に恨んだりはしていません」

「なるほど。それで六歳の時に日本に来られたんですね」

「ええ。来日してからは少し引きこもっていたんですけど、あるタイミングで都内の小学校に編入しました。ただ土地にも慣れていませんでしたし、コミュニケーションに対するトラウマも強く残っていましたし、この通り見た目が周囲と違うので、アメリカにいる時

よりも更に萎縮していました。でもしばらくすると、後ろの席の子も私と同じように全然喋らないことに気がついたんです」

瑠奈は葵を振り返り、目を合わせた。

「それが葵との出会いです。休み時間になっても二人ともずっと無言で座っていました。ある日の昼休みに偶然二人きりになるタイミングがあつて、思い切つて私から葵に声をかけました。葵はびっくりしていましたが、たぶん葵も私に同じ匂いを感じていたのか、少しずつ喋ってくれました。私も自分の言葉が同年代の子に初めて通じたことが嬉しくて、徐々に葵以外の子にも話しかけるようになりました。だから、私が人と喋れるようになったきつかけをくれたのは葵なんです。あの時、葵が後ろの席にいなかったら、たぶん私は今とはかなり違った人生を歩んでいたと思います」

葵は何度も頷き、瑠奈の影から姿を表すと、ぎゅつと拳を握つた。

「ほ……本当……です。わ、私も……る、瑠奈には……た、た、助けて……も、もらつてばかりで……」

初めて聞いた葵の声はひどく震えていたが、同時にとても聞きやすく可愛らしい声をしていたので、警察官二人はまた顔を見合わせた。

葵の部屋のリビングは小洒落たカフェのような内装だった。

床は無垢のウォルナットで、漆喰の壁には三枚の小さな抽象画が掛けられていた。部屋

の中央にはニスが擦り込まれた縦長のダイニングテーブルと、木目調のイームズのシェルチェアが二脚、向かい合って置かれている。スポットライトが照らすテーブルの中央には小さなパキラの鉢が置かれ、ブラウンが基調となった内装に緑を添えていた。

葵はカウンタースキッチンの中で業務用のグラインダーで豆を挽き、銅製のドリッパーとケトルを使って丁寧にコーヒーを淹れた。その流れは完璧で、所作には無駄なところや演出めいたところはなにも無かった。なおかつ、葵はコーヒーを淹れるという行為を心の底から楽しんでるように見えた。そして瑠奈も椅子に胡座をかいて座りながら、流れるようにコーヒーを淹れる葵の姿を楽しそうに見つめていた。

葵は出来上がったコーヒーをテーブルに置いて瑠奈の対面に座ると、申し訳なさそうに頭を下げた。

「ご、ごめんね……。助けてもらった上に、う、疑いまでかけられちゃって……」

「いいっていいって。いつものことじゃん」瑠奈は手をひらひらさせてあつけらかんと笑った。「疑いも晴れたし、犯人も捕まったし、オールオッケーでしょ」

瑠奈の言う通り、あまりにもチグハグな二人の関係に疑問を持たれることは珍しいことではない。

先ほどの警察官二人は瑠奈の話信じ、やがて警視庁のデータベースから配達員に過去にも逮捕歴があることが判明し、疑いは完全に晴れた。

「それよりもこれ見て。凜が作ったヘッドパーツの完成品。今日の任務で初めて使ったん

「だけど、試作品とは大違いの性能でさ」

瑠奈はカバンからヘッドパーツを取り出して葵に見せた。折り畳まれたアンテナ部分が伸びると、ウサギの耳のような形になる。

「もう無敵状態っていうかき。蹴り入れた相手がオモチャみたいに吹っ飛んじゃって、危うくビルの上から落とすしちゃうところだったんだから」

「それは……すごいね」

「葵ももう一度試してみたら？ 完成品ならもしかしたら適性があるかもしれないし」

「うーん……私は効果が出ないB判定じゃなくて、装備すらできないC判定だったから……」

葵は瑠奈から受け取ったヘッドパーツをしばらく眺め、確かめるように頭に装着した。

途端、嵐の海に浮かぶ船のように景色が揺れ始めた。

「おおう……」

「やつぱりダメかあ」瑠奈は身を乗り出して葵の頭からヘッドパーツを外すと、コーヒークップを持って天井を見つめた。「凜が言ってたけど、汎用化が当面の課題なんだって。なんで私だけここまで適性があるのかもよくわからないみたい。葵は今の状態でも十分強いから、装着できたら私の比じゃないくらい強くなると思うんだけど……てかこのコーヒーマ味っ？！ また新しい豆？」

瑠奈は予想外の宝物を見つけた時のように目を輝かせた。カップからは熟したプラムや

オレンジのような香りが立ち昇り、砂糖を入れていないにもかかわらず、ほのかにサトウキビのような甘さを感じる。

「エルサルバドル、サンタ・コネホ農園のパカマラ。樹上完熟のウォッシュド」と言いながら、葵もコーヒーに口をつけた。そして満足そうに小さく頷いた。完璧なものが完璧な場所に納まっていることを喜んでいるように見えた。

「葵は絶対カフェ開いた方がいいって。こんなに美味しいコーヒー私だけが飲んだらもつたないよ」と、瑠奈が真剣な顔で言った。

「む、無理だよ。接客なんてできないし」

「私が接客すれば解決するじゃん」と言つて、瑠奈はにこりと笑つた。「ていうか葵さ、どんどん喋れるようになってるよね？ 去年までは私と喋る時ですらこんなにスムーズじゃなかったのに。やつぱりブイチューバーの効果かな？ 登録者数、すごいことになってるよね？」

「あ、あれは事故みたいなので……たまたまネットニュースに……」

葵は恥ずかしそうに顔を赤らめた。

その日、二人は途切れることなく話を続け、瑠奈はそのまま葵の部屋に泊まった。あらためてデリバリーを頼み、日付が変わって少し経った頃に同じベッドに入った。

「ピ、ピアスって痛くないの……？」

葵が仰向けに寝ている瑠奈の形の良い左耳にそつと触れた。左耳のピアスは全て外され、その小さな空洞の羅列はまるで意味のある星座のように見えた。

「んー？ 葵もピアス開けてみたいの？ 私が開けてあげよつか？」

瑠奈が悪戯っぽく言うと、葵は慌てて首を振った。

「付けてる時は全然痛くないよ。開ける時もちゃんとすれば痛みも血もほとんど出ないしね。ただココとココを繋ぐ長いピアス——インダストリアルって言うんだけど、付けたまま寝ちゃうと寝返りの時に引つかかって痛い時はあるかな」

「やっぱり痛いんだ……」

「でもね、こっちは寝る時も外してないんだ。引つかかることもないし」

瑠奈も葵に向かい合うように横向きになると、右耳にひとつだけ付いている小さな青い花のピアスを小指で指した。

「それ……私が高校の入学祝いで買ったやつ……」

「そ。こっちはね、ずっと付けっぱなし」

4

翌日の放課後、「葵、帰るよー」という声と共に教室のドアが勢いよく開いたので、窓際の席に座っていた葵はスマートフォンを落としそうになった。

「いい加減慣れなつて」と、瑠奈が笑いながら教室に入ってきて、葵の前の席に座った。瑠奈は毎日のように葵を迎えにくるので、葵のクラスでも瑠奈はクラスメイトのように受け入れられている。残っていた生徒がすぐに瑠奈（と葵）の周りに集まつてきた。

「瑠奈ち見たよー。またスナップされたでしょ？」と言いながら、一人の女子生徒がファッション雑誌を開いた。街頭で撮影した一般人を紹介するコーナーで、ストリート系のファッションに身を包み、ガードレールに座っている瑠奈の写真が一ページ丸々使つて掲載されている。

「あれ？ こんなに大きく載つたんだ。声かけられた時は載るかわからないつて言われたんだけど」

「瑠奈ちが撮られたら載るに決まつてるじゃん。載つてる他の子と比べてもさ……なんていうか、違うよね」

「ねえ、本当に読モ（読者モデル）やる気ないの？ 瑠奈なら絶対プロのモデルになれるつて」

「ないない！ モデルなんて興味ないもん」と言つて、瑠奈が笑いながら顔の前で手を振つた。

葵はそつと雑誌を覗きこんだ。

確か二ヶ月ほど前に瑠奈と原宿を歩いていた時に撮られた写真だ。カメラマンは瑠奈と顔見知りらしく、探していたとまで言われていた。瑠奈を撮影した流れで葵も無理やり撮

られてしまったが、気が動転しすぎてどのように撮影されたのか覚えていない。

写真で見ると、瑠奈はポーズも表情も様になっていて本物のモデルのように見えた。まるで自分とは違う、どこか遠くのキラキラとした違う世界の住人のように見える。

「あれ？ これ一ノ瀬さんじゃない？」と、女子生徒が言った。

「え？ マジ？」と言つて、瑠奈も雑誌を覗き込んだ。「マジじゃん！ 葵ほら！」

瑠奈が指差した先には、直立不動の姿勢で道の真ん中に立つ葵の写真があった。

ページの隅の小さいスペースだったが、それは間違いなく葵だった。

「一ノ瀬さんも素材良いもんね」という女子生徒の声が遠くに聞こえた。

学校を出ると、二人は瑠奈の提案で新宿の繁華街に向かった。

凛の言っていた家出した未成年がたむろしているホテル周辺の路地。そこで瑠奈の友人の沙織（さおり）が中心となって放課後と休日に保護ボランティアを運営している。家出した未成年と距離が近い沙織なら、凍矢の情報をつなぐか知っているかもしれない。

葵は瑠奈が沙織のボランティアを時々手伝っていることは知っていたが、実際に沙織と会うのは初めてだった。

「なんだっけ、牛は牛連れ馬は馬連れだっけ？ 同類の方が話が合うっていう意味のことわざ」

肩がぶつかるほどの人混みを手を繋いで歩きながら、瑠奈は葵に言った。

「う、うん。あつてる」

「沙織のボランティアも正にそれが狙いでき。あそこに集まっている子は見た目は派手だが、内面はすごく敏感で警戒心の強い子が多いんだよね。だから大人の男の人とか警察官とかが取り囲んで家に帰りなさいって声かけても、かえって逆効果になる時も多いんだ。だけど私たちがみたいいな年代が『ちよつと話さない？』って声かけると、意外と向こうも本音で話してくれたりするんだよね」

「そ、そうなんだ……。話すだけでも、す、救われる時もあるよね……」

「いや、それだけじゃダメなんだ」と、瑠奈はまっすぐ前を見て言った。「いくらウンウンて話聞いても問題は無くならないじゃん？ 沙織はその辺もちゃんと考えてるから、クラウドファンディングで資金を集めてシエルターを運営したり、企業に協力してもらって救援物資の配布をしたりしてる。結局、行動しないと意味がないから」

「……あ」

自分の少し前を歩く瑠奈の背中を、葵は直視することができなかった。

ファッション誌に載った瑠奈の姿を見た時感じたが、時々ふと瑠奈がとても遠い存在に感じることもある。事実、瑠奈は自分には持つていない多くのものを持つていると葵は感じていた。そして瑠奈の友人達も、自分とは違って周囲を巻き込みながら先へ先へと進んでいる気がする。

瑠奈とは幼馴染であり、お互いが最初にできた友人同士だったことは間違いない。

だが、今となつてはそれに何の優位性があるのだろうか。

瑠奈は自分とは違い、常に先へ先へと進んでいる。

そして瑠奈自身に影響力があるので、周囲にも自然と影響力のある人間が集まつてくる。

それに引き換え、自分がしている活動といえばブイチューバーとして素顔を隠し、カウセンラーの真似事をしていただけ。それは瑠奈が言う通り、確かに問題を無くしていることにはならないのかもしれない。

瑠奈はなぜ今だに自分なんかに良くしてくれるのだろうか。

あるとき瑠奈から急に「もういらぬ」と捨てられるのではないか。

葵はそれがとても怖かった。

その路地は昼間でもホテルの陰になつて薄暗かった。

本来は車道のはずだが、入り口には区のマークが描かれた緑色のバリケードが設けられ、歩行者天国の状態になつている。バリケードの脇を抜けて路地に入ると、明らかに十代と思しき若者があちこちに車座になつて談笑していた。酩酊した様子で寝転んでいる若者も何人もいる。確かにこの状態で車を入れるわけにはいかない。

その異様な雰囲気は飲まれてしまった葵の手を引いて、瑠奈は路地の中央に設置されたテントに入った。

テントの中は広く、人で溢れていた。

量販店で売っている白い丸テーブルとパステルカラーの椅子が何組も置かれ、それぞれのテーブルにはピンク色の腕章を付けたスタッフと、路地の住人らしい若者が話をしていった。スタッフも一緒に手を叩いて談笑しているテーブルもあれば、泣いている女の子をスタッフも涙を浮かべながら慰めているテーブルもあった。

スタッフは全員、いわゆるギャルと呼ばれる女の子だった。

「おーす瑠奈ちー。おつかれー」

入口近くの「受付」と書かれた長テーブルでパソコンを操作していた一際派手なギャルが立ち上がり、瑠奈と葵に笑顔を向けた。サロンで焼いた肌に一際派手なメイクを施し、きつめに巻いた銀髪の毛先のみを水色に染めている。よく見ると気崩してはいるものの自分たちと同じ制服を着ていた。

「今日どしたの？ 可愛い彼女連れちゃってさ」

そのギャルに視線を向けられた葵は、まるで空腹の肉食獣に睨まれたリスのようにビクツと身体を強張らせた。

「沙織また髪色変えた？！ めっちゃかわいい！」と言いながら、瑠奈は笑顔で沙織と指を絡めた。

「へへー、ありがと。青は落ちやすいから、その前に見せられてよかった。でも髪めっちゃ痛んだよー。瑠奈ちみたい天然の金髪ならブリーチも一回で済むのにな」

「私は逆に黒髪に憧れるけどね。クールでカッコいいじゃん。あ、そうだ沙織、紹介するわ。この子が葵。私の女なんだから手え出さないですよ?」

「おー、あおぴ! やつと会えた!」と言いながら沙織は大きな目をさらに大きく開いて、葵のと目線を合わせるように屈んだ。「はじめまして。瑠奈ちからいつも話聞いているよ」

「葵、この子がさつき話した沙織。ここのボランティアチームのリーダーで、こんな見た目だけどすごくしつかり者だから」

「しつかり者の沙織でーす」と言いながら、沙織は葵に向かって踊るように両手を振った。葵はただ怯えていた。

「お? あおぴ顔色悪いけど大丈夫? ちょっと座る? テーブルは満席だけど受付の中だったらまだ椅子あるよ」

沙織は怯える葵の手を引いて強引に受付の中に引き入れた。瑠奈はその様子を見てクスクス笑いながら二人の後に続き、葵を中心にして並んで座った。

テーブルクロスで目隠しをした長机の下にはたくさんの箱が置かれていた。食料や飲み物、携帯電話の充電ケーブル、生理用品や常備薬などが見えた。企業からの援助で、困っている子に無料で配るのだと沙織は説明した。先ほどまで沙織が操作していたパソコンには、支援者に提出するものらしい細かい収支報告書が作りかけのまま表示されていた。

「——あのさ、ちょっと変なこと聞いていい?」

しばらく雑談した後、瑠奈が小声で切り出した。

「ん？ なに？ あ、ちょっと待って！ スポンサー企業から電話入っちゃった！」と言つて、沙織がスマートフォンを耳に当てた。「はい、牧村でございます。あ、いつも大変お世話になつております。はい……あ、はい、活動報告書は予定通り明日にはお出しできるかと思ひます。いえいえ、とんでもございません」

沙織のあまりの豹変ぶりに、葵は思わず口を開けた。

「ええ……御社のホームページにですか？ ありがとうございます。ぜひお願いいたします。ええ、とんでもございません。私共の活動が広く認知されればこちらとしても大変助かりますので、ぜひ御社のPRとしてお使いいただければ……ええ……今夜までにですか？ はい、かしこまりました。では今夜までに仕上げてメールにてお送りいたしますので、明日の朝にはご確認いただけるかと思ひます。ええ……とんでもございません。こちらこそありがとうございます。はい、失礼致します——」

沙織は何度もお辞儀をしながら通話を切ると、「ごめーん！ なんの話だっけ？」と元の様子で言つた。

「びつくりした？ 沙織、この見た目で秘書検定準一級持つてんの」と、溜奈が葵に言つた。

「このボランティア始めようと思つた時に取つたんだよねー」と言つて、沙織が葵に向けてピースサインを作つた。「スポンサーのおかげで私達は活動できてるわけだしさ、礼儀はちゃんとするのが最低限の誠意じゃん？ てか溜奈ち、なんの話だっけ？」

「ああ、えーとね……マジで変なことなんだけど、家出してきた子の中にはさ……身体売ってる子もいるの？」

「んー、まあ、そりゃね……」と言いながら、沙織はほんの少し顔を曇らせて背もたれに身体を預けた。「いないわけ、ないよね。でも理由はそれぞれでき、お金に困ってる子もいるし、人の温もりや、単純に気持ち良さを求めている子もいる。中にはまるで自分自身を罰しているかのように、徹底的に自分の好みじゃない人を選んでる子もいる。アタシらも止めはするんだけど、あくまでも個人のことだからね。どうしてもって場合はコレ渡してるんだ」

沙織はカウンターの奥に隠すように置かれているダンボールを指差した。隙間からコンドームの箱が見えた。

「で、なんで急にそんなこと？」と沙織が言った。

「いや、ちよつと嫌な噂聞いてさ」

「……嫌な噂？」

沙織が真剣な表情になった。

「うん。この辺の女の子を使って、無許可の風俗店を経営してる人がいるみたいなんだよね。ちよつと私たちのバイト先にも関わる話でき、もし何か知ってたら教えてもらおうかなと思って」

沙織は顎に手を当てて、しばらく目を閉じて考えると「もしかして、トーヤさんかな？」

と小さい声で言った。

葵と瑠奈が身を乗り出した。

「今、凍矢って言った？」と、瑠奈が聞いた。「ビンゴなんだけど……」

「え？ マジで？ いや、アタシも確信があるわけじゃないし、正直信じたくないんだけどさ……」沙織が声をひそめた。「ここにいる子達って一見仲良さそうに見えるけど、お互い本名すら知らないような関係だからさ、ちよつと揉めるとすぐに大ごとになるんだよね。喧嘩なんて日常茶飯事だし、救急車もしょっちゅう来るし、最初はこんな風にポランティアなんかとても出来ないくらい混沌としてさ。ただ、半年くらい前にトーヤって名乗る男の人が仕切り始めてから、少しずつ安定したんだ。三十代前半くらいで、爽やかイケメンって感じなのに筋肉すごくてさ。他の人と同じように素性がわからない人なんだけど、男女問わず『兄貴』や『お兄ちゃん』なんて慕われてね。いわゆる『買い』の人も追っ払ってくれたし、アタシのポランティアもちゃんと受け入れるようにみんなと話つけてくれたんだ。でも数ヶ月前、十人以上の女の子と一緒に行方不明になっちゃったんだよね」

沙織はそこまで話すと、一息つくように紙パックに入ったリングジュースを飲んだ。葵と瑠奈は無言で話の続きをまった。

「ここでは昨日まで普通に話してた子が翌日いなくなるなんて珍しくないし、深追いないことが暗黙の了解って感じだから、詳しいことはわからないんだ。ただ、溶け込む

のが異様に早かったことと、複数の女の子が同じタイミングでいなくなったことを考えると、トーヤさんは家出少女を闇風俗に落とす専門のスカウトマンだったんじゃないかって言ってる人もいる。家出した未成年が集まる場所はここ以外にもたくさんあるしね。それ以外に気になることもあるし……」

「気になること？」と、瑠奈が聞いた。

「防犯カメラがね、トーヤさんがいなくなる直前から今まで何回も壊されてるの。区が設置してるやつだからそう簡単に壊せるはずないんだけど。だからトーヤさんの失踪直前の様子とか目撃情報とか、肝心の映像が無いんだよね」

「こ……こ……こわ……こ……こ……ひ……ひ……」

葵が必死に喋ろうとするが、緊張しすぎて言葉が出てこないようだ。

「ん？ あおぴ声めっちゃ可愛くね？ てかどつかで聞いたことのある声な気がする……」と沙織が言った。

瑠奈が慌てて割って入った。

「防犯カメラを壊した犯人は映ってるんじゃないのか、って言いたいんでしょ？」

葵は必死に頷いた。

「いや、それが映ってないんだよね」と言いながら、沙織は肩をすくめた。「どんなトリックか知らないけどさ、いきなりガシャーンよ。他のカメラには音にびっくりして飛び上がる子が何人も映ってるんだけど、犯人らしき人はどこにも」

その時、葵と瑠奈のスマートフォンに凜から「急で申し訳ないが、今から会えないか」と通知が届いた。

緊急の呼び出しのようで、二人は沙織に断ってから待ち合わせ場所を指定してほしいと返事をした。

沙織と一緒にテントを出ると、沙織が道路の一角を指差して「あおび、あれ見える？」と小声で言った。オーバーサイズの服を着た未成年の女の子二人に、濃い色のスーツを着た男が話しかけている。

「あれ『買い』の人。トーヤさんがいなくなっってからめっちゃ増えてさ……。ちよつと対処してくるから、あおびもまた遊びに来てね」

そう言うと沙織は「すみませーん、企業ボランティアの方ですかー？」と周囲に聞こえるように言いながら男に近づいていった。男は明らかに狼狽えていた。葵は沙織の後ろ姿を憧れの眼差しで見つめた。

凜に指定された場所は渋谷駅から徒歩数分の場所にオープンした小さいカフェで、葵と瑠奈の学校からも歩いて行ける距離だった。

車がすれ違えないほどの細い坂の途中にそのカフェはあった。

夜七時でも十人ほどの若者が列を作っていて、少し離れた場所に黒いワンピースを着た凜が立っていた。凜は葵と瑠奈に気がつくとき小さい身体をびよんぴよんと跳ねさせながら

「こつちこつち」と言った。

凜がスタッフに声をかけると、三人はすぐに店内に案内された。

内装は業者に頼まず、スタッフが自分たちで仕上げたようだ。天井の配管は剥き出しで床も化粧板が敷かれておらず、壁はコンクリートに白いペンキを垂れるほど分厚く塗っただけだ。テーブルや椅子は端材を組み合わせたような粗末なもので、どこか海外の学校で長く使われていたような雰囲気があった。床面積の三分の一ほどを巨大な焙煎機が占めていた。

三人はカウンターのそれぞれ豆を選び、クロワッサンも一緒に注文した。代金は全て凜が出してくれた。瑠奈はスタッフにコーヒー豆の特徴や焙煎方法などを聞き、葵は抽出する様子を食い入るように見ながら瑠奈と店員の会話に聞き耳を立てた。

コーヒーとクロワッサンを受け取ると、三人は予約席と書かれたプレートの置かれているテーブルに着いた。

「急に呼び出してごめんね」と、凜が言った。

葵は首を振った。

「だ、大丈夫。ここ……すぐ来たかったから……。予約も、で、できなくて……」

「……そうじゃん！ 何かおかしいなと思ってたけどここ予約できない店だよね？」と、瑠奈が思い出したように言った。「並んでる人からすぐ視線感じるなと思ったけど、そういえば葵と来ようとした時にホームページに予約できませんって書いてあったよ」

「あおつぴがコーヒー好きだから、ねじ込んだ。方法は聞かないで」

凜は無表情のまま両腕を曲げて力こぶを作るポーズをした。葵と瑠奈は思わず吹き出した。

「で、本題なんだけど」と、凜は声を潜めて言った。「昨日、瑠奈ちが倒してくれた人妖の件なんだけど……」

「ああ、あいつ凍矢のこと何か喋ったの？ 半分くらいは口から出まかせかなと思ってたけど」

「いや……あの人妖、今朝死んでたんだよね……」

コーヒーカーップを口元まで運んだ瑠奈の手が止まった。

「……え？」

「収容所に運び入れた時点でもまだ失神してたから、今朝から取り調べる予定だったんだ。でも、今朝ドアを開けたら床に倒れてたみたい」

「……私、そんなに強くやつちやつたっけ？」

瑠奈の顔が青くなつた。凜はすぐに首を振る。

「瑠奈ちの攻撃が原因じゃない。首にシーツが巻かれてた。検死も終わって、死因も縊死で特定されたから」

「じゃあ……自殺ってこと？」と瑠奈が言った。

凜はまた首を振つた。

「いや、そもそも収容所は自殺ができないようになってる。壁も床も分厚いウレタン製で、窓も外からしか開かない。もちろんロープをかけられる突起や窓枠も無いし、内側にはドアノブも無い。まあ世の中に絶対は無いから、思いつかないような方法でシーツをどこかに引つ掛けた可能性も無くはないけど、私は他殺だと思ってる」

「じ、じ、自分で、く、首を絞めたつてことは？」と、葵が恐る恐る聞いた。

「それも無理。自分で自分の首を絞めても、死ぬ前に失神して力が緩むから最後まで締めきれない。監視カメラの映像も解析中だけれど、さすがに個室の中まではね……」

葵と瑠奈は顔を見合わせた後、沙織から聞いた情報を凜に話した。

凜は一通り話を聞くと、テーブルの上で手を組み、そこに額を乗せてしばらく目を瞑って考え込んだ。

「色々調べてくれてありがとう」と凜は顔を上げて言った。「今回はちよつと気味が悪いね……。昨日言った通り、凍矢が見つかったら瑠奈ちにお願ひすると思うから、今夜中にヘッドパーツのメンテナンスはしておくね。持つてるなら今見せてくれる？」

瑠奈は鞆からヘッドパーツを取り出して凜に渡した。凜は小型のパソコンを取り出してヘッドパーツとケーブルで繋ぎ、簡単な検査を始めた。

「うん、衝撃で少しダメージ受けてる箇所がある。一度分解して掃除してから——ん？」パソコンの画面に現れたポップアップを見ると、凜は顔を顰めながら「あのバカ……」と小声で呟いて乱暴にパソコンを閉じた。

「ごめん、あおつぴ、悪いけど今から出勤できない？」と凜が言った。「任務中の一般戦闘員が劣勢になって、最悪なことに担当オペレーターが逃げ出したみたい」

5

光沢のある黒いレオタードに、黒い猫耳のような小さなヘッドパーツ。

一般戦闘員用のバトルスーツを身にまとった七森春香（ななもり はるか）は、廃墟になった市民プールの底に立たされていた。両手首はロープでスタート台に固定されて身動きが取れない。背中に感じる冷たくざらついたコンクリートの感触が不快だったが、それ以上に自分をこのように拘束した目の前の男の存在が猛烈に不快だった。

「まったく、今日はなんてラッキーな日だ。まさか春香ちゃんみたいな可愛い女の子と出会えるなんてね」

その男は見た目同様に不快な声で言うと、春香の黒髪を恋人の様にくしゃつと撫でた。春香は悔し涙を浮かべながら男を睨み上げる。男はその視線を気にせずに、バトルスーツに浮き出た突起のひとつひとつを鼻が触れるほど顔を近づけて観察した。

男の鼻息が春香の肌に触れ、全身が粟立つ。

「マジでキモいんだけど……今すぐ死んでくれる？」

春香が吐き捨てるように言った。

本当に嫌悪感の塊のような男だ。

見た目も全く気にしていないのだろう。ぼさぼさの髪に無精髭を生やし、でつぶりと突き出た腹の肉は溶けた餅のようだ。唯一身につけている黒いビキニパンツの中央が高く隆起していることに気がつき、春香は汚物を直視した時のように反射的に目を逸らした。

「死んでくれなんて酷いじゃないか……せつかくボクの彼女にしてあげようと思ったのに」

ぶぢゅつ……と音を立てて、男は蛇のような素早さで春香の唇を吸った。

「んむうッ?!」

一瞬何が起きたのかわからず、春香は大きく目を見開いた。そして自分が何をされたのかを理解すると、必死に身体を振って抵抗した。男は春香の顔を両手で挟み込むように押さえると、膨れて死んだナマコのような舌を春香の口内にねじ込んだ。同時に勃起した男根を春香の腹部にぐりぐりと押しつけてくる。

「んむうーッ!!! んッ?! んんんんーッ!!! んぐえッ?!」

ズグンッ……という音がプールの壁に反響し、激しく抵抗していた春香の動きがピタリと静止した。

身体に貼り付くようなバトルスーツの生地を巻き込んで、春香の引き締まった腹にずんぐりと太った男の拳が手首までめり込んでいる。

男は春香の腹に拳を埋めたまま、ゆつくりと春香の唇を解放した。あまりの衝撃に春香

の瞳孔は完全に収縮しており、口は男に吸われていた時そのままに大きく開けた状態で固まっている。男の唇と春香の舌の間で糸を引いた唾液がプールの底に点々と落ちた。

「あ……あが……あ……」

「ぐひひひ……キスされながら腹パンされたのは初めてかい？　もしかして、キスも初めてだったのかな？」

男は再び素早く春香の口を吸い、舌を吸ったまま春香の引き締まった腹に何発も拳を埋めた。

「んぶッ?!　んごおッ?!　んぶうッ!!　ぶぐおッ?　んぶえッ!?　んおおおおッ!!」

腹を殴られるたびに、春香の身体は電気ショックを受けたようにビクビクと跳ねた。

背中が壁に密着しているため衝撃の逃げ場がなく、口も塞がれているため呼吸もままならない。男はようやく春香の唇を離すと、春香の鳩尾を鋭く突いた。

「ぶはッ!　おッ?!」

突然急所を突かれ、ふつと春香の意識が遠ざかる。だが男は構わずに春香の下腹部、胃、鳩尾をランダムに殴り始めた。

「ぐえあッ!!　おッ?!　ぐぐッ!!　んぶッ?!　ぐあああッ!」

「可愛い反応だねえ。好き勝手に殴ってくれたお礼をたっぷりしてから、朝までレイプしてあげるからね」

ぶぢゅん……という水つぼい音が響き、春香の子宮が潰れた。

「んおッ?!」

春香の口から濁った悲鳴が漏れる。

男はそのまま正中線を上へとなぞるように春香の胃、鳩尾をピンポイントに殴り、すぐさま胃、子宮と下降しながら殴った。まるでエレベーターが各階に止まるように鳩尾、胃、子宮の三箇所をリズミカルに殴られ、拷問のような苦痛に春香は悶えた。

「ほらほら、こうやって違う場所を素早く殴られると、まるでお腹全体が潰れていくように感じるだろう?」

「おッ?! ゴッ?!? んぶッ! がッ!! めえッ! おぐッ?! ぶふッ! ぐあッ?! ぐえッ! がッ! あッ! あがッ! あがあああッ!!」

衝撃が強すぎてもはやどこを殴られているのか理解できず、春香はただ身体をガクガクと痙攣させながら天井を向いて唾液と悲鳴を吹き上げた。脳がパニックを起こしており、壊れた玩具のように頭を振りながら苦痛に悶える。

男がようやく攻撃を止めると、春香は全身を脱力させて項垂れた。男が春香を拘束しているロープを解くと、もはや自力で立つことすら出来ずプールの底にぺたんと尻餅を着いた。

「ぶふふふ……春香ちゃんは本当に可愛いねえ。ご褒美をあげようかな」

男は春香の髪の毛を掴むと、春香の顔の前でビキニパンツをずり下げた。

限界まで膨張した男根が跳ね上がり、べちっ……という音と立てて男の腹を打つ。朦朧とした春香は目の前のそれが何なのか一瞬理解できなかった。

「あ……え……？ ひ、ひいッ!？」

「ほら、大好きな彼氏のチンポだよ。好きなだけしゃぶっていいからね？」

「やつ……やだッ! やだぁッ! あ……んぐうッ!？ ん……んぐおおおおッ?!」

「おふう……喉が縮まって気持ち良いよ春香ちゃん……」

男が恍惚とした声を上げる傍らで、無理やり男根を振り込まれた春香は地獄のような鳴咽を漏らし続けた。張り出したカリ首が喉の粘膜を何の躊躇もなく擦り上げ、死を感じるほどの苦痛を与えている。

男の昂りと反比例して、春香の意識が途切れかける。しかし春香が失神する直前、喉の奥深くまで挿れ込まれていた男根が忽然と消えた。新鮮な空気が肺を満たし、春香は激しく咽せながら顔を上げた。

そこには春香と同じくらいの背丈の小柄な女の子が立っていた。年齢も同じくらいだろうか。女の子は白い差し色が入ったピンクのプリーツスカートとショートジャケットを羽織り、編み上げのスニーカーを履いている。一見チアリーダーの格好に見えたが、中にはセパレート型のスポーティなインナーを着ている。

春香の着ている汎用型のレオタードタイプではない、上級戦闘員のみが着ることを許される特別仕様のバトルスーツだ。

上級戦闘員の女の子は睨むような視線を春香に向けると、無言で手を伸ばした。春香は恐る恐るその手を掴む。

「も、申し訳ありません。賤妖だと思って油断しておりました……」

不甲斐ない自分に怒っているのだと思い、春香はその手を握ったまま恐縮したように敬礼した。

「だ、だ……」女の子は睨むような視線はそのままに口を開いた。「だ……だい……だ、大丈夫……?」

春香は女の子の手が震えていることにようやく気がついた。

「……は、はい。唾液は飲まされましたが、体液はまだです。意識ははっきりしていますので、チャームの影響は皆無か軽微だと思います」

女の子は頷くと、プールサイドに設置されている梯子を指差した。

「わ、私、い、一ノ瀬……葵。や、休んで……」

春香はしばらく呆けたように葵を見つめていたが、やがて慌てた様子で葵の両肩を掴んだ。

「あ、葵さん。早くこのプールから出てください！ このプールには——」

春香が言い終わる前に、男が二人に突進してきた。葵は春香を突き飛ばし、男を手四つで受け止めた。

「ひひひひ……また可愛い子が出てきたな……。おおおっ?!」

葵は鋭く息を吐くと、体をさばいて素早く男のバランスを崩した。前のめりに転びそうになる男の腕を極め、同時に足払いをかける。脇固めの体勢でプールの底に倒れ込むと同時に、ごきん……という音が男の肩のあたりから聞こえた。

「がああああッ!?!」

男が肩を押さえながら悲鳴を上げてのたうちまわる。

葵はすかさず手錠のようなものを取り出すが、男は強引に暴れて葵を突き飛ばした。

「くそっ……春香ちゃんとは大違いじゃないか……」男は抜けた肩を強引に嵌めると、葵を指差した。「だがな……君ももう手遅れだぞ。このプールに入って三分経ったからな」

葵は怪訝な顔をして首を傾げる。その隣に春香が駆けてきて小声で話しかけた。

「葵さん、助けてくれてありがとうございます。私が少しでも時間を稼ぎますので、すぐにこのプールから出てください」

葵は目を丸くして春香を見た。

「あの賤妖の汗には筋弛緩効果があります。その能力自体は珍しくはないのですが、あいつはこのプールの中で生活することで成分を濃縮していたんです。普通なら近距離で十五分以上浴びなければ効果が出ないのですが、このプールに入ると三分程度で効果が出てしまいます」

「だ、だ、大丈夫」と言いながら、葵は春香に親指を立てた。「私……力、あまり、か、関係ないから」

葵は止める春香を制して、一人で男に近づいていった。男は下衆な笑みを浮かべ、再び葵に手四つを挑んだ。先ほどとは違い、組んだ瞬間葵の身体が一気に後方に押し下げられる。

「葵さんダメです！ 逃げてください！」
春香が叫ぶ。

葵の身体がぐらりと後方に倒れた。

だが次の瞬間、男の身体が空中で一回転した。

巴投げが見事に決まり、プールの底に背中を強打した男が潰れた蛙のような悲鳴を上げる。男はなんとか起き上がり、すでに立ち上がって構えていた葵に再び掴みかかった。葵は掴みかかろうと伸ばした男の腕を取り、自分の身体を巻き付けるようにして男の下に潜り込んだ。

男の両足が地面から浮いた。

教科書に出てくるような綺麗な背負い投げだった。

男は再び背中をコンクリートに強打し、過呼吸を起こして悶えた。葵は素早く男の片腕と頭を掴むと、男の頭に枕をするように自分の片足を滑り込ませ、そのまま首の上にもたがって体重を落とした。

マウントポジションでの三角絞めを極められ、男はくぐもった悲鳴を漏らす。

体重を利用しているため、筋力は重要ではない。体勢的に葵のスカートの中に男の顔が

完全に隠れる形になったが、もちろん男にその状況を楽しむ余裕も無かった。
一瞬で極められた男はしばらくバタバタと暴れたが、すぐに意識を手放した。

6

アンチレジストのミーティングルームには葵と瑠奈と凜、そして春香の四人がいた。
プロジェクトには防犯カメラの映像が投影されている。

八台のカメラがいずれも新宿の同じ通りをそれぞれ別の角度から映していた。地面に座って話し込む多く若者や、それを遠巻きに監視する警察官。興味本位で覗きにくる通行人、沙織の運営するボランティアのテントも見えた。

「凍矢、たぶんこいつだね」と凜が言うと、椅子の上で胡座をかいていた瑠奈が身を乗り出した。

「マジ？ もう見つかったの？」

「裏取りはまだだけどね。あおつぴと瑠奈ちが聞いてきてくれた条件に合う人はこいつ」
凜がパソコンを操作すると、家出少女たちに囲まれた男性がアップになった。なるほど沙織の言う通り整った顔をした男性だ。艶のある豊かな黒髪にグレーのダメージデニム。黒い無地のTEEシャツからは太い二の腕がのぞいている。ゴツイシルバーのネックレスやバンダは全て同じ高級ブランドのものだ。野生的な雰囲気醸し出すその男性に、家

出少女たちは明らかに羨望の眼差しを向けていた。

「凍矢の本業は会員制高級スポーツジムの経営者。ジムの情報はネット上にはほとんど出てなくて、会員にならないと連絡先や場所すらわからない。そして会員になるには会員からの紹介が必要。まあジムは表向きで、実態は例の人妖が言った通り家出した未成年を使った違法な風俗店だけだね。客の希望に合わせて女の子はおろか、希望があれば男の子まで斡旋してるみたい」

瑠奈が呆れ顔で頬杖をついた。

「マジで疑問なんだけどき、なんで合法的なお店がたくさんあるのにあえて違法なことするわけ？」

「本物思考つてあるじゃない？ プロじゃない人とか、本当の未成年とか、そういうのに価値を見出す人もいるんだと思うよ。たぶんだけど」と言つて、凜が肩をすくめた。

「凍矢の画像データとジムの場所はみんなに共有しておくから、瑠奈ちとおおっぴは念の為に凍矢の面取りをお願いできる？」

「葵は今日予定があるから、この後私だけで沙織の所に行つてくるよ。突入は裏が取れ次第つて感じ？」

「いや、万全の体制で挑みたいからもう少し時間をちょうだい。凍矢はかなり戦闘力があるみたいだし、汎用性を高めたヘッドパーツの試作品ももうすぐ試験運用ができそうだから、できればそれに適性のある一人をバックアップとして付けたいんだよね」

「バックアップなら葵でよくない？ ヘッドパーツ付けなくても十分強いんだしさ」と、瑠奈が言った。「そういえば葵と一緒に任務したことなかったから、いい機会じゃん」

「いや、上級戦闘員同士が同一の任務に就くのは避けたいんだよね。縁起でもないけど、敵が強力すぎて二人同時に欠けるのは避けたいし。もちろん一人でも欠けることがないように支援することが私たちオペレーターの仕事だから」

「もしよかつたら、私に行かせてください」と言つて、春香が手を挙げた。「私みたいな一般戦闘員が、上級戦闘員のチームに入れていただけることは異例だと聞きました。色々と勉強させていただき、私も上級戦闘員を目指したいんです」

「私はヘッドパーツ頼みだからあまり参考にならないと思うけど、じゃあ春香ちゃんにお願いしようかな。私もバックアップがあつた方が心強いし」

「よし……じゃあ、まとまつたところで本日の最重要議題に移るよ」と言つて、凜はテーブルの上で組んだ手に顎を乗せ、全員をゆつくりと見回した。物々しい雰囲気にも他の三人が息を呑む。

「春香ちゃんの歓迎会をどこでやりますか!？ それぞれ食べたいものを言つてくださーい!」

新宿の例の通りに着いた瑠奈は、思わずカバンを地面に落とした。

ボランティアのテント周辺で複数の赤色灯が回転している。テント周りには立入禁止の

テープが張られ、多くの野次馬が取り囲んでいた。通りの住人らしき女の子が何人か泣き崩れている。

瑠奈がテープを越えようとすると、走ってきた警察官に止められた。

「離してください！ 沙織の友人なんです！」

「だめです！ 現場検証が終わるまで当事者以外は入れません！」

押し問答を聞きつけて、テントから瑠奈と同じ制服を着た女の子が出てきた。ミルクティーのような色に染めた髪がほとんど包帯で隠れている。沙織の友人で、ボランティアメンバーの絢香（あやか）だった。絢香は瑠奈の姿を見ると、顔をくしゃくしゃにして駆け寄ってきた。

「瑠奈ち……。沙織が、沙織が……」

「……沙織がどうしたの？」

非常線越しに絢香の手を握りながら、瑠奈は声の震えを必死に抑えた。

「わかんない……。ミーティング中にいきなり倒れて……頭から血が出て……他の子ども次々と……」

「ちよつと待つて……まさか……」

最悪の事態が頭をよる。だが、絢香は口を結んで首を振った。

絢香によると、沙織は意識が無い状態で集中治療室に入っているものの、なんとか踏ん張っているらしい。他のメンバーも病院で治療中だが命に別状はなく、絢香は最も軽症

だったため応急処置のみ施され、搬送はこれからだそうだ。

「いったい何があつたの？」と、瑠奈が聞いた。

「昼間にトーヤさんが来たの……。沙織と話をさせろつて」

「……凍矢が？」

絢香は頷いた。

「久し振りだったから沙織も喜んで対応したんだけど、二人きりで話をした後、めっちゃ怒って帰ってきたの。トーヤさん、自分が運営している家出した未成年の自立プログラムが軌道に乗ってきたから、私達が保護している子を定期的に連れて来いって沙織に言つたみたい。でも話を聞いたらただの売春斡旋で、沙織も怒ってすぐに追い返したつて……。このボランティアを出来るようにしてやったのは誰のお陰だつて言われたみたいだけど、それとこれとは話が別じゃん！」

絢香は涙を拭つて話を続けた。

「沙織が運営メンバーに緊急招集かけて、トーヤさんがまた来た時の対応マニュアルを作つてただけど、いきなり沙織が椅子から弾き飛ばされたように倒れたの。たくさん血が出てたし、何が起きたのかわかんなかったし……。ほかの子や私も……」

「凍矢にやられたの……？」

「わかんない……。何も見えなかった。でも、殴られたんだと思う……。すごい力だったけど……」

瑠奈の表情がすつと変わった。

普段はあつけらかんとした瑠奈の変化に、絢香も思わず戸惑いの色を浮かべる。

瑠奈がスマートフォン画面を絢香に向けた。

「……凍矢つてコイツで間違いない？」と、瑠奈が感情を抑えた声で聞いた。

「え？ う、うん……この人がトーヤさん……」

「そつか。じゃあ今から凍矢の所に行ってくる」

「え……瑠奈ち、なに言ってるの？」

「場所はわかってるから」

「まって……意味わかんない……」

「沙織が目を覚ましたら伝えて。仕返ししとくから、って。絢香もお大事にね。後でお見

舞いに行くから」

その時救急車が到着して、中から素早く隊員が降りて絢香を呼んだ。

瑠奈は絢香に背を向けた。

背後で絢香が何か言った気がしたが、瑠奈は振り返らずに野次馬していたタクシーの後

部座席のドアを強引に開けた。

壁際に設置された大型のマルチトレニングマシンや懸垂台が無ければ、そこはジムというよりは高級ホテルのラウンジのように見えた。

ダウンライトが埋め込まれた天井と床はマットな黒。四方の壁はダークブラウンの木目調で、一面のみ全面が鏡になっている。

室内には二人の男がいた。

一人は凍矢。黒い無地のハーフパンツとノースリーブのシャツを着て、まさにトレナーという出立ちだ。もう一人はスーツを着込んだ中年男性。生地は高級そうだが、異様に突き出た腹の肉がシルエットを台無しにしている。

「たまには中野さんもいかがですか？　ほとんど俺しか使っていないんで、マシンが泣いてるんですよ」

凍矢が親指でマシンを指しながら冗談っぽく言うと、中野は苦笑しながら顔の前で手を振った。

「冗談言わないでくれよ凍矢くん。君に言うのもなんだが、私は運動する人間の心理が全く理解できないんだ。筋トレだったりマラソンだったり、自分から進んで辛い思いをする人間は全員マゾだと思ってる。人生は短い。探究すべきは苦痛ではなく快楽だ。そうだろうか？　そのために高い金を払ってこの会員になっているんだからね。それにしても、

この前の子は最高だったよ……。やはり十代の子は肌のハリが違うし、あらゆる部分がフレッシュだ。いくらプロにコスプレをさせたところで、こればかりは再現できんからな」
凍矢は右手の人差し指と中指にはめているゴツいデザインの指輪をいじりながら頷いた。

「おつしやる通りですよ。本物を知らなければ比較すら不可能だというのに、最初から類似品や紛い物で満足する人間は所詮その程度だと言うことです。もちろん中野さんをはじめ、この会員様にはそのような方は一人もおりませんがね。多少法に触れるリスクを取ってでも、本物を知ろうとする方ばかりです」

「ははは、当然だよ。我々のようないわゆる高額所得者は、共通言語として本物を知っておく必要があるからね。食事に酒、車にアート、もちろん女もな。それに、これは社会貢献も兼ねているんだろう？ 家出した未成年たちの支援になつているのなら私も嬉しいよ。で、そろそろ今日支援させてもらえる子を紹介してもらいたいのだが——」

その時、蹴破るような音を立ててジムのドアが開いた。
凍矢と中野が同時に入口を見る。

「お取り込み中どうもー」と言つて、白いバトルスーツを着た瑠奈がヘッドパーツを角のように立てて入ってきた。

「おお！ こりやまた今回はとびきり上玉だな。しかも外人とは……。白人にバニーガールの衣装を着せるとは、さすがは凍矢くんのセンスだな」

「……なんだお前？」と、凍矢が低い声で言った。

剣呑な雰囲気の中野の顔から笑みが消え、瑠奈と凍矢を交互に見る。

「お、おい……凍矢くんどういうことだ？ この子が今日の相手じゃないのか？ ちよつと待て、この子を見せられた後に他の子なんてあり得ないぞ。なあ君、手違いだったら個人的に契約しよう。いくら欲しいんだ？」

興奮した様子で近づいてきた中野の顎先を、瑠奈のつま先が弾いた。中野は屠殺された豚のようにその場に崩れ落ちた。

「……おい、いきなり出てきて人の客を蹴飛ばすなよ。まずは自己紹介くらいしたらどうだ？」

「アンチレジスト、真白瑠奈。沙織の友達って言った方がわかる？」

「……面倒くせえな」と言つて、凍矢は舌打ちをしながらため息をついた。

「は？ なにそれ？ 私さ、友達を傷つける奴がマジで許せないから手加減できないかもよ？」

「それはこつちのセリフだよ。大切な取引を潰されたんだからな。俺をそこら辺の人妖と同じだと思わない方がいいぞ。使役系つて知ってるだろ？ 今までアンチレジストの戦闘員は何人も返り討ちにして、廃人になるまで犯してきた。まあこのバカの言う通り、お前はなかなか楽しめそうな身体してるけどな」

凍矢は失神している中野を壁際に蹴り飛ばすと、拳を鳴らしながら瑠奈に向き合つた。

瑠奈の渾身の膝蹴りが凍矢の腹部にめり込むと、ようやく凍矢は亀のようにうずくまつた。

「はっ……はぁ……はぁ……！ なによこいつ……めちやくちや強いじゃない……」

瑠奈は失神した凍矢を見下ろしながら、顎を伝う汗を拭った。呼吸を整えながらしばらく観察していたが、起きる気配がないことを確認すると、背を向けてマルチトレーニングマシンに寄りかかった。体力が回復次第、早急に凜に連絡しなければならぬ。そもそも凜は自分がここにいることすら知らないのだ。

突然、ヘッドパーツからビリッとした信号が脳に流れた。

緊急警告だ。風を切る音。瑠奈は咄嗟に身を屈めた。今まで頭があった場所を、何かが高速で横切った。

パキン……という乾いた音が頭上から響き、つま先から徐々に泥の中に埋まっていくような感覚があった。

瑠奈の背中を冷たい汗が流れた。

この感覚はよく知っている。

任務を終えてヘッドパーツを外した時、身体強化機能が解除された反動で、自分の身体が泥のように重く感じるのだ。まるで地球に帰還したばかりの宇宙飛行士が、重力に耐えられず歩けなくなるように。

「よく避けられたな。完全に不意打ちを狙ったのによ」

必死の形相の凍矢がバーベルを握りしめながら、折れたヘッドパーツの破片を踏み潰した。瑠奈はなんとか平静を装うように努めるが、凍矢の優れた嗅覚は瑠奈の動揺を機敏に察した。

「ん？ どうした？ 耳が折れただけなのに随分と動揺してるな」

凶星を突かれ、瑠奈は反射的に凍矢の顎を狙って蹴りを放った。凍矢は難なく躲す。その後も何発か蹴りを放つが、結果は同じだった。

「へえ……」と言って、凍矢は嗜虐的な笑みを浮かべながらバーベルを捨てた。「よくわからんが、マジでそのウサギ耳が強さの秘密だったんだな」

拳を鳴らしながら瑠奈と距離を詰める。

瑠奈は後退りするものの、やがて背中が冷たいものに触れた。

鏡張りの壁だ。

ズブンツ……！ という重い音が部屋に響いた。

凍矢の鉄塊のような拳が、瑠奈の腹に手首まで埋まっていた。

「んぶうツ?!」

瑠奈はすばめた唇から勢いよく唾液を吐き出すと、腹を抱えるようにして両膝を床に着いた。

「あつ……?! おえツ……! げあツ……!」

「おいおい、まだ腹パン一発しか食らわせてねえぞ。マジでただの女の子に戻っちまったのか？」

凍矢が瑠奈の付け襟を掴んで強引に立たせると、すぐさま拳で腹を突き上げた。一般男性とは比べ物にならない威力の攻撃に瑠奈の内臓は掻き分けられ、床から両足が浮く。

「ぐぐえッ?!」

「さつきまでの威勢はどうした? え? 手加減できないんだろ?」

ゴリュツ……という嫌な音が響き、凍矢の拳が瑠奈の鳩尾を突き上げた。

「ひゅッ……!!」

一瞬、瑠奈は何をされたのか理解ができず真顔になった。

恐る恐る自分の胴体に視線を落とすと、人体急所の鳩尾に、ありえない深さで拳がめり込んでいた。そして脳がその事実を認識すると、猛烈な苦痛が脳内で爆発する。

「あ……ごぶッ?! んおおおッ?!」

「まだ寝るんじゃねえぞ? 俺をここまでコケにしてくれた女はお前が初めてだからな。たつぷり礼をしてやるよ」

凍矢は瑠奈を壁に磔にするように、重い拳を何発も瑠奈の腹に埋めた。

「ぐッ?! おぐッ! んぶえッ?! ぐあッ! ぐぶッ?! おッ?! ぐえッ?!」

乱打を撃ち込まれ、瑠奈は倒れ込むこともできずに悶えた。ようやく攻撃が止み、瑠奈

が壁から崩れ落ちるように倒れかかると、凍矢は真下から腹を突き上げた。

「おごツ?!」

瑠奈の身体は紙のように宙に浮き、受け身も取れずに床に落下した。弾みでヘッドパーツの本体が頭から外れ、床を滑って入り口近くの壁に当たって止まった。

「がはッ……!! あ……うぁ……」

瑠奈は仰向けに倒れながら、両手で腹を抱えながら悶えた。青い瞳は半分以上が瞼に隠れ、だらりと舌を垂らしながら喘いでいる。

凍矢はあらためて瑠奈の全身を見回すと、下半身に血液が集まってくる気配を感じた。男の欲望を具現化したような女が際どいバニースーツを着て悶えている。中野に同意することは癪だが、確かにこれほどのレベルの女はそうそういないだろう。

凍矢は瑠奈の腰を跨ぐように立つと、グロッキーになっている瑠奈の腹に容赦無く拳を突き下ろした。

完全に弛緩した瑠奈の腹に大砲のような拳が撃ち込まれ、衝撃で部屋全体が揺れる。

「うぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁッ?!」

途切れかけた意識を無理やり引き戻され、瑠奈は目を見開いて絶叫した。

「まだ寝るなって言っただろ? お礼がまだ終わってねえんだよ」

夜ノ森メルルの配信が終わった。

時計の針は夜九時を指していた。

葵はいつものように汗で濡れたヘッドフォンを拭き、冷めたコーヒを一息で煽ると机に突っ伏した。五分ほどじっとした後、むくりと起きて洗面所で身支度を整える。

以前なら配信後はたっぷり三十分は動けなかったはずなのに、最近は消耗度合いがかなり減ってきた。喋りも心なしか滑らかになつてきた気がする。瑠奈にもどんどん喋れるようになってきたと言われたばかりだし、いよいよブイチューバー活動の効果が出てきたのではないだろうか。

瑠奈といえば、今日はやけに来るのが遅い。

沙織のところで凍矢の人相確認をすればいいだけなので、そこまで時間はかからないはずだ。お互いの合鍵を持っているので、いつもなら葵が配信中に静かに入ってきてリビングで待っていることが多いのに。

リビングを覗いてみたが、やはり瑠奈の姿は無かった。

なにかのはずみで倒れたのか、テーブルの上のパキラの鉢が倒れて土がこぼれている。

ふと、強い胸騒ぎのようなものを感じた。

瑠奈に電話をかけようとしたとき、スマートフォンのディスプレイに表示されたニュースアプリの通知が葵の目に止まった。

『新宿区、未成年保護ボランティアのテントで通り魔？ 複数人が緊急搬送』

葵は考える間もなく通知をタップした。

『本日午後七時ごろ、東京都新宿区の路上で「複数の人が倒れている」と警察や消防署に連絡があった。場所は家出した未成年が多数集う通りで、警察によると被害者の五人はいずれも現地で保護ボランティアとして活動しているメンバーだという。被害者は頭や体を強い力で殴られたとみられ、代表の牧村沙織さん（十七）は重体で集中治療室に入っている。凶器は見つかっておらず、警察は話ができる被害者から事情を聞くなどして詳しい状況を調べている』

葵は瑠奈に電話をかけたが、数回コールした後に留守番電話になってしまった。

一瞬躊躇ったが、凜にも電話をかけた。

凜はワンコール目の途中で電話に出た。

「もしもし、あおつぴ？ 珍しいね電話なんて」

「あ……う……る、瑠奈……」

「え？ 瑠奈ちがどうしたの？」

「れ、連絡……いつてないですか？」

電話の向こうで、凜が思案する気配があった。

「私のところには何も来てない。そっちにも帰ってないってことだよね？」

「あ、さ、沙織さんのテ、テントが、お、襲われたみたいで……」

「……え？」電話の向こうでキーボードを叩く音が聞こえた。「本当だ……。ここ、瑠奈ちが裏取りしに行った場所だよな？ あおつぴ、まずは落ち着いて。まだ瑠奈ちが巻き込まれたって決まったわけじゃないから。こっちで情報収集して、なにかわかつたらすぐに連絡する。それまでは動かずに自宅待機でお願い」

「は、はい……」

電話を切ると、耳が痛くなるほどの静寂が葵を包んだ。

葵はひとまず倒れた。パキラの鉢を元に戻し、こぼれた土を集めて捨てた。テーブルを拭いた後、ぼうつとしたままダイニングチェアに座る。目の前の椅子に、いつも通り胡座をかいて座る瑠奈の幻が見えた気がした。

世界から自分以外の人間が死に絶えたような気がした。

時計は凜との電話を切ってから五分しか進んでいなかった。

居ても立つてもいられず、葵は合鍵を持つて瑠奈の部屋に向かった。エレベーターを三階分降りて、「真白」と書かれたプレートの嵌っているドアの前に立った。呼び鈴を押しても返事がない。念のためにドアに耳を押し当てても、物音がしない。そもそもこのマンションは室内の音がほとんど外に漏れ出ないのだ。

鍵を開けて中に入る。

嗅ぎ慣れたルームフレグランスの優しい香りが出迎えた。

間取りは葵の部屋と一緒だが、ウォルナットとグリーンを基調とした葵の部屋とは違

い、瑠奈の部屋は白とステンレスにナチュラルウッドを用いた極力生活感を排したインテリアでまとめられている。

整理整頓は行き届いていた。

リビングとダイニングのそれぞれの壁には、白く塗られた大小さまざまな木のブロックがランダムに配置された板が一枚ずつ掛けられていた。光の当たる角度でブロックが陰影を生み出す立体アートで、瑠奈がアメリカで買い付けてきたものだ。食器やカップも全て白で、同じものが二つずつ揃えられていた。

もちろん瑠奈はいない。

勉強部屋や洗面所もいつもと変わらない様子だったが、葵が最後に寝室に入ると、ようやく異変が見つかった。

クローゼットが開けっ放しで、別れた時まで瑠奈が着ていた制服や下着が床に投げ捨てられていた。

瑠奈が脱いだ服を床に放置したまま出かけるなどありえない。そして、葵はクローゼットの中の何がなくなっているのかすぐに理解した。

アンチレジストのバトルスーツがなくなっている。

「凍矢のところにいったんだ……」と、葵はつぶやくように言った。

ベッドのヘッドボードには、葵と二人で撮った写真が何枚も置かれていた。

葵は写真の中の瑠奈の笑顔をしばらく見つめた後、部屋を飛び出した。自室に戻って服

を全て脱ぎ、バトルスーツに着替えてから大きめのスポーツウェアを重ね着した。外に出てタクシーを拾い、あらかじめスマートフォンに表示しておいた住所を運転手に見せた。

一瞬、凜に連絡しようと思ったが、昼間の凜の言葉が蘇り思い止まった。

『縁起でもないけど、敵が強力すぎて上級戦闘員が二人同時に欠けるのは避けたいし』
瑠奈と自分のどちらかが欠けるのなら、自分が欠ければいい。

自分の人生は、瑠奈がいなかったら、死んでいたも同然なのだから。

ジム全体を揺らすような衝撃が響いた。

「ぐぐッ?!」

チンニングマシンが軋んで悲鳴のような音を立て、それに拘束されている瑠奈の身体がくの字に折れた。

ぐぼっ……と音を立てて、瑠奈の腹に深々と刺さった拳が抜かれると、瑠奈は全身の力が抜けたようにがっくりと項垂れた。両手足を大の字に開いた状態で拘束されているので倒れ込むことができず、ただ苦しそうに肩を上下させている。

「おら、そろそろ限界だろ？ 素直に抱いてくださいって言えよ」

凍矢が瑠奈の髪を掴んで顔を覗き込んだ。積み重なったダメージでボロボロになりながらも、瑠奈は鋭い視線で凍矢を睨む。

「へえ……まだそんな顔ができるのか。まあいい。生意気な女は嫌いじゃないからな」

凍矢はマシンをいじり、背当て。バットを瑠奈の腰にあてがった。凍矢の意図を理解した瑠奈の顔から血の気が引く。

「ずぐんッ……！　という重い音が室内に響いた。

「おおッ?!」

瑠奈の瞳孔が一気に収縮し、大きく開けた口から唾液が噴き出した。凍矢の拳は瑠奈の背骨に触れるほど深くめり込み、拳とバットに挟まれた瑠奈の腹は目を逸らしたくなるほど痛々しく陥没している。

「どうだ？　背中に衝撃が抜けないからかなり効くだろ？　早く仲間を裏切って僕の女になれよ」

「ゲホッ……は？　バカじゃないの？　あんたみたいなキモいナルシストの女になるくらいなら、死んだ方がマシなんだけど」

ズブンッ……！　という水つぽい音と共に、瑠奈の腹がまた陥没した。

「グッ?!」

「調子に乗るなよ？　自分の立場わかってんのか？」

凍矢は瑠奈の頭を自分の腹を覗かせるように押さえつけ、そして固めた拳を瑠奈の腹に連続で打ち込んだ。一撃一撃が重い攻撃をヒストンのように連続で打ち込み、瑠奈の腹は陥没がおさまらないほどの速さで潰れた。

「ゲッ！　んぶっ?!　おッ?!　ぐぐッ?!　がッ?!　うあッ?!　あぐッ！　ん

おッ!!」

「おらおら、自分がどんな風に腹ブツ潰されてんのかちゃんと見ろよ。ガキができねえ身体になっても知らねえぞ」

両手足を拘束されているため、もちろん瑠奈は攻撃を躲すどころか防衛することもできない。そのうえ背中もパットに押し付けられているため、衝撃は逃げることなく全て瑠奈の腹に集約された。

凍矢の容赦の無い腹責めがようやく終わると、瑠奈は全身を脱力させて崩れた。両手首を拘束具で吊らているため倒れ込むことはないが、両足は内股になり体を支えきれない。

「焦らしてんのか知らねえが、そういうのは相手を選べよ？ 俺の女になれるチャンスなんて滅多にねえぞ」

凍矢が朦朧としている瑠奈の顎を持ち上げ、徐々に顔を近づける。唇が触れそうになった瞬間、瑠奈は反射的に顔を引き、凍矢の眉間に唾を吐いた。

「……てめえ」

凍矢の眉間に、まるで縦に裂けたようにシワが寄った。次の瞬間、大砲を打つような重い音が部屋を揺らした。

「ひゅぐッ?!」

凍矢が瑠奈の鳩尾を、両足が完全に浮くほどの威力で突き上げた。凍矢が手早く瑠奈の

拘束を解くと、瑠奈はビクビクと痙攣したまま崩れ落ちるように床に倒れ、腹を抱えるようにして悶絶した。

「がはッ……?! うあッ……! あがッ……!」

「手加減無しの鳩尾、かなり効くだろ? 格闘技やってる男でも十分はまともに動けねえ」と言いながら、凍矢は悶絶する瑠奈を見下ろした。「ま、今回は俺の負けだ。そんなスケベな格好でスケベな身体を見せつけられたらさすがに我慢できねえ。無理矢理は俺のガラじやねえんだけどな」

凍矢は瑠奈の腕を掴んで無理やり引き起こすと、見せつけるようにじりじりとトレーニングショーツを下ろした。やがて常人のふた周りほど太い男根が勢いよく跳ね上がり、ベチッと音を立てて瑠奈の頬に当たった。

「は……? え? ひ、ひいっ!」

瑠奈はしばらく何が起きたのか理解ができない様子だったが、頬に触れている現実を理解すると顔色がみるみる青ざめた。

「こんなバキバキになったのは久しぶりだ。朝までには今までの男、全員忘れさせてやるよ」

「やつ、やだっ! 来ないで!」

「おいおいビビり過ぎだろ。ま、こんなにデカイチンポは初めてかもしれないねえがな」

瑠奈は身体が思うように動かない中、必死に顔を背けて逃れようとする。しばらく揉み

合いが続いたが、男性器を見ないように必死に目を瞑って逃れる瑠奈の様子に、凍矢にある疑問が湧き上がってきた。

「……おい、お前まさかとは思うけどよ、その見た目で処女とか言うんじゃねえだろうな？」

凍矢の一言に、瑠奈の肩がビクツと跳ねた。

それが無言の回答になつていると気がつき、瑠奈もしまったと思つたのか、二人はしばらく無言のまま動かなかった。

「おいおいマジかよ」凍矢がせせら笑いながら髪を掻き上げた。「そうかそうか。ならばビビんのも仕方ねえな。じゃあ特別に俺がパーソナルトレーニングしてやるよ。どういう風にお前の身体使えば男が喜ぶのか、イチから全部教えてやる」

きい……という金属が擦れる音がして、凍矢と瑠奈はジムの入口に視線を向けた。

ピンク色に白いラインの入ったプリーツスカートにシヨートジャケット。チアガールを軽量化したようなバトルスーツに身を包んだ葵が静かに入ってきた。

カツン……と音を立てて、葵のつま先に瑠奈の壊れたヘッドパーツの破片が当たった。

葵は廃墟で古い写真立てを見つけたように、そつと手に取った。

「葵……？　なんで……？」と、瑠奈が目を丸くしながら言った。

葵はボロボロになつて座り込む瑠奈の姿を認めると、息を呑むような表情になつた。

「つたく、今日は妙な客が多いな。バニーガールの次はチアガールかよ」